

---

# 非日常物語

神無月幸乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非日常物語

### 【Zコード】

N1750Y

### 【作者名】

神無月幸乃

### 【あらすじ】

この世界は、3つの世界が重なり合つことで成り立つている。

- 1つは、人間界。
- 2つは、靈界。
- 3つは、異能界。

この3つの世界のバランスが保たれることで、人間界は平穏な暮らしができた。

しかし、あることがきっかけにこの関係は崩れ去ってしまう - - -

靈界の魔物が異能界、そして人間界を支配しようと、それぞれの世界に刺客を送り込んだ。

魔物により支配された人間界は異能界に助けを求める。

それを受け取つた異能界の大天使が、人間界と異能界を合併させた。人間界に入った能力者たちが、魔物を退治し、人間界には無事平和が戻つた

そして一つになつた2つの世界は一度と離れることはなかつた。それから、千年の月日が流れた。

人間界に住む、能力者の青年にある使命が下された。

家出した次期大天使候補の少年を探せと

## Prologue

## Prologue

この世界は、3つの世界が重なり合つことで成り立つてゐる。

111 人間界

3つは、異能界。

この3つの世界のバランスが保たれることで、人間界は平穏な暮らしができた。

魔物により支配された人間界は異能界に助けを求める。

それを受け取った異能界の大天使が、人間界と異能界を合併させた  
人間界に入った能力者たちが、魔物を退治し、人間界には無事平和  
が戻った - - - - - - - -  
そして一つになつた2つの世界は一度と離れることはなかつた - -  
それから、千年の月日が流れた。

ある日、人間界に住む、能力者の青年にある使命が下された。

家出した次期大天使候補の少年を探せと

家出しが決算不実領の少年を指す



薄暗い裏路地に、一人の少年が倒れていた。  
この少年の髪は、海のような深い蒼色だった。  
この路地にとけこんでしまった。そつなほど。

「うん . . .」

少年は目を覚ました。まだ眠いのか、目をしきりに擦つている。  
起きることを拒む体を起こし、むくつと立ち上がる。

少年の目は、髪と同じ蒼だった。

地べたで寝ていたので、当然の理屈で体についた砂を払い落す。  
一通り体の砂を落としたところで、少年は右や左をきょろきょろ見  
渡す。

そして場所を確認したところを、思ったことを素直に呟く。

「 . . . ここどこだ . . .」

なんでこんなところにいるんだ?・どうこうことだ?・どうなつてこるんだ?

少年にはわからないことがたくさんあった。

そして、最大の疑問が一つ。

「俺は、誰なんだ . . . ?」

少年の呟きは、暗い闇に吸いつきまれていった

- - - - -

赤や黄色、色とりどりに染まつた落ち葉が散り、冷たい風が吹く秋のある日曜日 - - - - -

佐倉悠飛こと僕は三津里公園のベンチに座つたいた。

それには今日の朝、僕宛に届いた手紙にあつた。

真つ赤な紙に今日の暁、三津里公園に来いとのみ書かれたものが届いたのだ。

気分は、朝鮮出兵の赤紙。ああ、空が青いなあ。

こんなことするのは、大天使側近の凶暴女以外いないだろうな。「だあれが凶暴だつてえ？」

「そりやあもうあなた以外いなつて、ヽヽえ？」

今今まで誰もいなかつたはずの目の前に、黒のロングコートに、膝まであるブーツをはいた美女が立つていて。いつの間につてか、凶暴つて聞かれたつてか . . .

「声、出てました？」

僕がそう尋ねると、美女 - - - ミサさんは隣に座りながら

「読心術くらい、心得ている」

と、そつけない返事を返された。

此処までの会話は皆様にはいくつかの説明がいると思つ。

僕は、人間界で高校生をやつていて異能界の能力者だ。

人間界に潜んでいる魔物が悪さをしないように見張つていて。

そして、次期大天使の育成係でもある。

育てるといつても、ご飯を作つたり、掃除をしたり、ヽヽ 這樣的の

ではなく、

体を鍛える、心を育てる係だ。ちなみに勉強も。そして、今日が . . .

「イウ、様の御誕生日だ」

「心読むのやめてもらえませんか?」

「なら読めないようと思考しろ」

まあ、そんなわけで、10歳の誕生日に親元を離れて、僕に引き渡されるというわけだ。

今日は、きっとその用事で呼び出されたんだと思つ。

「んで、肝心のイウ、は?」

「家出なされた」

当然の」とく発された言葉に僕は一瞬、耳を疑つ。

「は . . . ?」

「い・え・で・だ、家出」

「ちょつ、タ・ン・マ・・・」

頭が追いつかない。

え、家出? イウ、が?

「続けていいか?」

「はい、どうぞ」

「イウ、様は此処がどこだかわからなことわめきながら出られて行かれた」

「と、こうことは . . . 」

「記憶喪失と考えるのが一番自然だろう。そして、貴様の仕事は . . .

僕は、思わずつばを飲み込む。

「.

「イウ、様を探し出せ」

意志（後書き）

此処まで読んでくれたてありがとうござります！  
悠飛君、どうなるのか！？

不良

三  
「十九」

卷之三

僕は重い足取りで公園を出る

あの後、ミサが笑顔で言った言葉が僕を地獄へ突き落す。

お前は北玲玲を任せたがみは五田でが

「お前は日本を何だと思っているんだあああああ！」  
僕が叫ぶと、周囲の人間が振り返る。

今はそんなことはかまっている暇はない

「おいおいねーちゃん、こんなとこ入つてくるもんじやねーぜえ  
誰かが何か言つてるけど、僕男だから関係ないよな。

國學大典

肩を掴まれ、振り返ると、さきしゃべっていた不良が立っていた。しかも、考えながら歩いていたせいか、大通りから外れた路地に入っていた。

「は？ 僕のことですか？」  
そう話しかけると、

「せつあはよくもシカトしててくれたなあねーちゃん」  
いやいやしながら答える。

どうやらねーちせんとは僕の「」とだつたみたいだ。  
すう、と息を吸う。

「すみません、僕男なんですけど。それに勝手に入つたことは誤り

ますんでその手放して

もらえませんか。急ぎの用事があるんですけれど、五田で北半球一周しなきやいけないんだよ。

## 何の罰ゲームだよ、これ。

「お前は、これから売るからだめだ。そのガキと一緒にな  
ういいながら、親指で示した場所には、赤髪の少年がいた。  
相当怖いのか、体を小さくし、怯えていた。

あれ  
・  
・  
・

## 第二話 不良

今僕の足元にはさっきまで元気にはざいていた不良がいた。  
ちょうど、踏みつける形で。

「僕が心の中で高笑いしていると、赤髪少年が話しかけてくる

「ほんとここいいちやんがやつたのか！？」  
僕が、にやりと笑いながら尋ねると

そう、笑顔で返された。え、この子かわいい。笑顔がすぐ純粋な感じ。

この世界では、天然記念物に指定できるほどだ。

二三が二三にせりや春日原に  
うつて、盆前三事はつ二三は用事ハシギ

おとと名前を尋ねるときは自分からされ  
頭をなでながら言う。すると  
僕は体倉慾升だ。

「擲出」指的就是「投擲」，「擲」就是「投擲」，「擲出」就是「投擲出去」。

といいながら、腰に抱きついてきた。

「それ以外わかんないのかあ さてええええ！」

「記憶喪失、ねえ」

「ん、にいちやん、なんか言つた？」  
首をかしげながら尋ねる飛鳥。

今日はやけに、記憶喪失に縁があるぞつてか、じつがイウ、じゃないの？

でも飛鳥つて言つてたしなあ。正直イウ、の顔覚えてないし。

「ふう . . .」

とりあえず、ミサさんに電話かなあ？

#### 第四話

川川川川川

路地には不釣り合しなどこか抜けた音が響く

なおなお懲戒 どこにかけてんの

僕の手で子供の神を引いて、弾りながら、升息は零れる  
・・・あれ、この子こんなに幼かつたっけ？暗くてよく見えなかつ

ミサカ

「うんとね、知り合いだよ」

そこまで話すと、ガチャッと音を立ててケータイから声がする。

「あ、僕、悠飛です」  
「ああお前か。何の用だ」  
「イウ、らしき人物見つけました」  
すると、飛鳥が裾を引っ張りながら  
「なあなあ、イウ、ってだあれ？」  
と聞く。ちょっと、今会話中……

「その声は誰だ？」

「んと、飛鳥って少年なんだけど、記憶がないらしい。そこで僕あ

卷之三

「そいつの髪は何色だ？」

「髪ですか？」

・・・飛鳥をみると髪はきれいな赤だつた。

飛鳥は話についていけないらしく、キヨトンとした顔で僕を見上げ

ていた。

そんな飛鳥の髪をケシヤニと撫で、会話を戻る。

「赤です。すごくきれいな」

一 ああ、  
そうか

それも口黙っておいた//おやん

「それは、イウ様じやないな」

「おやんの、一言で、おやうとがつかりした。」

でも、どこかで安心している僕がいる。

「そうですか、それじゃあ、はい、ああ、それで」

僕はそこへしゃべり電話を切る。

「おー、それじゃあ幾回かしない

ビシ！と指さしながら叫ぶ。

ビクッと体を揺らした飛鳥だが、ピシッと敬礼して

# 「ハイつ悠飛大将！」

いい返事をしてくれた。  
うむ、いい子だ

君は詰憶かなしみにしね  
といひにとて

儀は升鳥は背を向て不勝て五歩歩く

業は五〇九〇年六月二日、ハルビンに開港式典が開催された。

いているのが見えた。

くるつと振り返り腰に手を当てる。

「君には、僕と一緒に旅に出るんだ！」

堂々というと、飛鳥は鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をした。  
僕は思わず吹き出しそうになるが、何とかこらえる。

「どうかい？」

にこりと微笑み尋ねる。

すると、飛鳥はひもがされたように僕に抱きついてきた。

「どうまでも付いていきます！悠兄いー！」

これからが、僕らの新しいスタートの始まりだ。

今、僕らは出発の準備をするべく、都心にせりついていた。  
多くの人々が行き交うスクランブル交差点。

人々のしゃべり声の合間に車のクラクションや、自転車のベルの音  
が聞こえる。

そんな中、飛鳥は目を輝かせていた。

「うわあ！ すっげえ、人多っ！」

「はいはい、落ち着いて」

きょろきょろする飛鳥の頭に手を置き、ポンポンと、軽くたたく。

「なあなあ、何買うの？」

いまだに興奮しているちみつこに、少しイラついた僕は  
きれいな笑顔を浮かべ、殺氣を出す。

「少し黙ろうか」

すると飛鳥はそれきり黙つてしまつた。

しかも周囲にいた人間も固まつて僕を凝視していた。

やだなあ、軽いジョークだよ。

ま、それは置いといて、だ。

今日は、食糧などを買いに来たわけではない。

やはり、旅は危険を伴つものなので、武器の七つやハツは持つてお  
きたい。

ん？ 数が多いつて？ 多いに越したことはないのを - - - - -

僕は、飛鳥の手を引き薄暗く、細い道に入つていった。

「おお～ . . .」

都心から少し離れるだけで、こんなものがあるとは思わないだろ？  
僕らは路地に並んだいくつもの店のうちの一つ、「B e e t x B e  
et」と書かれた店へはいった。

からん、と両を立てドアを開く。

中には壁を埋め尽くさんばかりの武器が置いてあった。

最新ミニサイルから長刀まで、より取り見取りだ。

「こんちは、親父さん」

僕がカウンターで新聞を読んでいる親父さんに話しかける。だが返事は返つてこない。

壁に話しかけているようでなんだか空しいが、いつものことだ。もう慣れてしまった。

飛鳥はとくに、大量の武器に驚いたのか、僕のジャンバーの裾を握つたままぴつたりとくつついでいる。

この子にあつたもの、

「探せなくひやね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1750y/>

---

非日常物語

2011年11月12日18時44分発行